

〔資料〕

沖縄国際大学 沖縄法政研究所

第28回講演会

日時：2010年6月2日(水)午後1時～2時30分

場所：沖縄国際大学13号館308教室

ジャーナリズムの現場から

—沖縄の社会を切り開く視座—

幸地光男

(元・琉球新報記者)

■司会(大山盛義専任所員) 皆さんこんにちは。定刻となりましたので、これから沖縄法政研究所第28回公演会を開催したいと思います。本日お話頂くのは、講師として幸地光男先生をお招き致しました。ジャーナリズムの現場から沖縄の社会を切り開く視座という事でお話を頂きたいと思います。お話を頂く前に沖縄法政研究所の所長の稲福よりご挨拶とそれから講師の幸地光男先生の紹介をお願いしたいと思います。

■稲福日出夫所長 皆さんこんにちは。稲福です。幸地さん今日は、私達の講演依頼を快くお引き受け下さり有難うございます。私の方から一言、幸地さんの略歴を掻い摘んでご紹介いたします。幸地光男さんは1944年、昭和19年2月に名護で生まれました。その後、名護高校、明治大学と進学し、1968年に琉球新報に入社しております。琉球新報社では編集局内で社会部、地方部、運動部、政経部と、局内のほぼ全ての部局を経験しております。東京支社長も2年ほど務めております。3年前に新報を退社され、現在は趣味の山歩き、或は陶芸にはまってるのと、はまってるといいますが、精進しているという事です。私と幸地さんは、しばしば共通の先輩、

友人宅で酒をご一緒させて頂いております。或は普天間のネオン街のカウンターでも時々偶然遭遇致します。そうした折に、幸地さんの論文の展開の仕方、視点の幅の広さ、深さにいつも感銘を受けており、また幸地さん独特の笑い声は、周囲を温かく包んでくれます。後輩の私達の話でも真剣に耳を傾けて下さり、いつも温ったかいアドバイスを頂いております。今日はジャーナリズムの現場から沖縄の社会を切り開く視座というタイトルで、皆さんの中にはジャーナリズム志望の方も多いかと思います。実は私も、私もその昔、琉球新報に志を向けた事があったんですが、なんかその、振られてしまったという、辛い思い出があります。ですが、皆さんには最後までご清聴を頂き、以上簡単にご紹介と所長挨拶と致します。以上です。

■司会 それでは幸地光男先生にお話を伺いたいと思います。先生よろしくお願い致します。

■幸地光男 ご紹介頂きました幸地光男です。ご丁寧な紹介で誰の事かと思うような、立派な紹介をさせて頂きました。私は30年余り、現場で新聞記者の生活をしておりました。その間ちょうど、1968年、1969年、1970年という時代は大変騒乱の時代でして、頭に描くのはまあ、幕末期みたいな雰囲気イメージ頂いていただければ、ちょうどどんな風な時代でした。はっきり言えば植民地でした。植民地を取っ払う運動が復帰運動ピークの入口でした。そのピークに差し掛かった時に、私は記者になろうという事で、入社致しました。幸いに新報で入社できて、その間、紹介ありましたように、駆け出しの頃は地方部におりました。地方部は北部支社という所でした。名護の方にありました。そこで2年半、そして社会部に移りまして、社会部から政経部という風に移ります。そして政経部から今度運動部。国体の頃には運動部におりました。運動部から今度はまたもう一回、政経部に、という風な政経部と社会部、地方部を行ったり来たりでした。今日は、各ポジションにいた時の取材を通して、私が見てきた沖縄を知って頂ければと思って、講演を承諾致しました。

新聞記者というのは、どこもそうですが、非常に好奇心の強い人間じゃないと、ちょっとやっていけない所があるんですね。好奇心が強いというのはお節介焼きな所もあります。ジャーナリズムというのはスタートからしてそんなものです。よく我々は後輩には「新聞記者は馬のように驚き、牛のように粘り強く」と教えてます。何かが起こったら、馬のようにヒヒーンと鳴く、あーいう驚き方をしなさい。そし

て事件或は事柄が進むと、これは牛のように粘り強く追求していくというのが記者のスタートラインの心構えです。記者は、ジャーナリズムは何をするかということ、まず一番重要な事は、世界各国どこ行ってもそうですが、権力をチェックするというのがまずジャーナリズムの第1の使命です。第2の使命というのは人権を守ると、人権を守る、榮譽を守るというのがジャーナリズムの基本です。手許にあります、これが新聞倫理要項というのですが、これを読んで頂ければ、新聞記者はこういう事をするもの、というのが具体的に書いてます。これは全国の記者は全部これに目を通します。いわば憲法です。記者の憲法です、これは。権力をチェックするという事の中で、よくニクソン大統領を追いつめたウォーターゲート事件というのは、皆さんもよくご存知だと思います。1972年、ウォーターゲートビルにこそ泥が入ったという、これがスタートでした。ところがこれをウッドワード記者ら二人が追っかけているうちに、実はこれは共和党が仕掛けた秘密盗聴のための準備をしたという二人だったという事で、これが発端となって、どんどん広がっていきます。最後は大統領が揉み消しまでやろうという事で、ついに、2年がかりの追及の中で、大統領が辞任に追い込まれるという、有名なウォーターゲート事件です。簡単にいえばそんな風な話なんです。日本でも田中角栄、立花隆さんが書いた、田中角栄の金脈というのが出てきまして、それで退陣させられたという風な有名な事件があります。これはどこでもジャーナリズムの本質は権力を野放しにしないというのがジャーナリズムの存在理由と思う。そういう視点に立って報道の狭間からという事で、今日は地方部にいた頃の話から話を進めたいと思います。

私がちょうど入った1970年前後ですから、ちょうど復帰の前ですね。その時は沖縄はまだ復帰してませんから、高等弁務官というのがおりました。その人達のつまり米軍の認可無しに何も出来ないという風な状況ですので、私はこれは植民地時代かと思っています。その頃にですね、ある日夕刊に、1段のワシントン発の記事がありました。確か、沖縄の基地建設に何百万ドルでしたかね、予算が下りたという簡単な記事でした。記事として5行ぐらいの記事。これを見た時ちょうど私は北部担当でしたので、これがもし、この夕刊を見逃していたら、大変になるところでした。米国の予算で、何を建設するのも知りませんでした。北部に営林所という所があります。木を植えたり育てたり守ったりする所です。2週間に1回ぐらいそ

にお昼を食べに行きながら、そしてそこを回って暇があると国頭、東、大宜味村を回りました。山を越えなければ行けないところですので、東村に行く場合は、ちょうど大宜味村から、横断するような形になるわけですね。そこはよく東村役場に行く時に通過しておりました。ちょうど営林所の人と雑談してる時に、最近ヘリコプターが国頭の山の上をよく飛んでるという事を聞いておりました。なんかあったんですかね。という話でしたその時は。その時の1段の記事を見た時に、もしかしてこれは山中に何かを造ってるんじゃないかというのが北部支社の記者仲間の話でした。支社長がおりまして、これはもし北部に何か造るんだったらどの辺に造るかという半分冗談のような話が始まりました。これが取材のスタートなんですね。ついでだからじゃあ、東村に取材行く時一帯を全部見てみましょうかという事で、山中を歩く時は非常に注意深くヘリコプターの飛び方を、注意しておりました。そして、2週間ぐらいですかね、ほとんど毎日通いました。その時営林所の人にもヘリがいつも同じような方向に飛んでるといふ事に気がきました。しかし、これが山林ですから、道があるわけじゃないです。横断道路から山の中が見えるわけじゃないですね。ちょうど12月の寒い頃でしたね。クリスマスがいよいよ近づいてきた頃です。これは北部じゃないかもしれん、とあきらめはじめました。或は金武が嘉手納の中に造るのじゃないのという話になって、諦めかけていた頃でした。ちょうど支社長が「寒くて、シヨン便でもして帰ろうか」という夕方でした。取材していた3人も車を降りると冬の寒い風が吹いていました。道路脇に車を置いて、赤土の上をちょっと登って、シヨン便でもしようという時に、目の前に、眼前の下の方から飛行機が舞い上がってくるじゃありませんか。ヘリコプターが舞い上がったのでびっくりしました。これはもしかするとという気持ちでした。もっと踏み込んで山の頂上に上がって行きますと、グランドのようなヘリ基地がすでに造られているんですね。これはたまげました。その時にこれは間違いなくヘリ基地の建設だという確信致しました。これから確認の取材が始まるわけですが、深夜になってやっと分かったのは、軍事基地を担当してる記者から、間違いなくという事でした。同時に我々が取材してる市町村の村長さんはもちろん全く分かっていませんでした。翌日の記事が出るまで全く分かりませんでした。この一帯はノグチゲラの生息地として、自然保護がかかっている所で、非常に重要な自然保護区域でした。そこにましてやヘリ基地

というのは、ないだろうというのが普通の考えですが、実際にヘリ基地はこういう風に造られておりました。この記事が出たのはクリスマスイブの日でした。12月24日の朝刊にデカデカと新報の記事が出ました。それから国頭村、東村、大宜味村は大騒ぎになりまして、翌日には各村役場の村長さんが集まって、反対運動を起そうと、村中が動き出しました。軍事記者が書いた記事を読みますと、伊部岳を発射地点としてそのヘリ基地を着弾地点に弾を打ち込むような訓練をするらしいという風な話でして、びっくりしました。反対運動が起こった時、我々この、いち早くこの現場の中に飛び込んでみようという事になったんですが、これが、ひと山ふと山越えないといけない所で、簡単に行ける所じゃないんですね。望遠レンズを持って来て写した写真はなんか、テニス場みたいなようなものが写ってて、そこに戦車みたいなものが幾つかありました。工事用のブルドーザーみたいなものが幾つか写っています。反対運動が起こって正月頃になったら、もう村中、沖縄県の労働運動している人達がズラッと並んで、旗の後ろにヘリ基地造らさんという、おばあさん達も随分並びました。数千人が動いたんじゃないかと言われるぐらい、道路という道路、山道ですから、反対運動が起こってこれはとうとう、さすがアメリカも断念しました。それから忘れられた頃に、ご存知のようにこれ今東村に高江の方に造ってるヘリはあれの再来だと思ってます。ちょっとした、ちょっとした記事から、もしかしてという、好奇心、興味を持った時から、取材が始まるんですね。これをほっとしていると、我々気が付かんうちに、ジャングルの中ですから誰も分からんうちにヘリ基地が造られていたと思います。その時のヘリ基地は今行きますと、茂みになっております。元通りの山とはいきませんが、かなりの雑木が生えてきて赤土はきれいに埋まっておりました。

もう1つですね、沖縄に海洋博があったのはご存知ですよ。海洋博が決まってから、本部に決まってからですね、こんど海洋博は何をするかということ、未来都市という、海に浮かぶ未来都市というのがテーマで、この未来都市というのが概念が分からないんですね。どういう未来都市を作ろうとしているのか、海の上にどういう風な未来都市を作ろうとしているのか、これがさっぱり分かりません。で、各社とも、これは国の事業ですから、東京を中心にした取材陣が未来都市の図を求めてしのぎを削っていました。夜討ち朝駆けというのがありますが、担当の人の方に

ですね、朝早く行って出勤前に行って門前であるいはお茶を一緒に飲みながら取材する。他社が聴けないものを聞く。夜討ちというのは、皆が帰った後、深夜になってですね、一杯お酒でも飲んで寝ようかという頃合を見計らってお邪魔すると、入れてもらえるかどうかこれは分かりません。これはもう信頼関係というのがどこまで築いているかが勝負なんですね。玄関で立ち話で終わる記者なのか、応接間に通されるような記者なのか、台所まで通されるような記者なのか、記者によって随分違うんですね。その踏み込み方によって、この人の信頼度というのが大よそ分かってきます。海洋博の時ですね、皆東京の記者は一生懸命捜し、もちろん本社の記者も一生懸命捜してました。ちょうど北部にいたわけですから、もしかしてというのは気分的に持ってたんですが、北部で取材するというのは市町村しかないんですね。国の出先機関というのはそういう風な対象のものは無かったです。もしかしてあれば、淡い期待という程度のもので役所の市長さんや町長さん、村長さんからなんとはなしに聞いてました。記者の生活というのは出勤しますと、警察に事件が無いのかどうかというのがまず第1です。これ地方の場合ですね。本社の場合は社会部の担当なんですが、警察は警察ばかり担当する事件記者というのがおります。地方部の場合は警察を見ながら役所も見ながら、という風な幾つも担当部所があるわけですね。場合によっては裁判も見なきゃならんという事もありました。市町村長とは、いつも一緒にお酒を飲んだりお茶を飲んだり、ユンタクしてるわけですよ。その、ある日ですね、町長の部屋に入ってソファに座ってますと、どこからか電話が来て部屋を出たんですね。その時非常に緊張した顔だったんで、テーブルの上を何気なく見たら、海洋博という表書きがこう見えるんですね。えっ、と思って近づいてみたら、海洋博の構想図が置かれているんですね。この構想図は持っているのは後から分かったんですが、沖縄で2人しか持っていないという、その1冊なんですね。その1冊が現場の、海洋博の現場だという事で送られて来たようで、これをじゃあどうするかという事なんです。もう時効ですから話してもいいと思うんです。「町長さん、2時間だけ私に貸してもらえませんか」と話すと「いくら君でもこれはマル秘の秘だ。ダメだ。」との返事。「取材源は絶対を守る。迷惑はかけない」と食い下がり30分ばかり説得するとやっと「しょうがないか」とつぶやき「私はここにいなかったことにしてくれ」と苦笑いしながら渡してしてくれた。ここにいない。

というのは、私が勝手に持ち出したことになるのです。このかけひきが、呼吸が取材では一番大事です。それからはコピーをして本社に駆け上がり、東京支社の記者と、沖縄の担当の記者と総がかりで翌日の記事を仕立てるわけです。海に浮かぶ未来都市というものが図として画かれているんです。これがもう決め手でした。これが海洋博の未来という、未来都市というものが沖縄県民に初めて見えた都市です。海に浮かぶ未来都市というのは、この図を見て皆さん納得した、こういう事をしようとしてるのかという風な、又、各出展館があるんですが、それも全部配置されておりました。色々見ているとこれはもう非常に細かい図でして、1メートルも狂いの無いように、実際の海洋博会場のように出来上がってました。後にこの手に入れたこの構想図は、どこから出たかというのが、東京で話題になったそうです。お互い東京の人は本社が書いた。本社の人は東京が書いたと、こう、それうまくかわしてこの記事は連載記事として、何回も出て来ました。非常に具体的だったんで、県民の皆さんには海洋博というものがいよいよ出発だなあという、気持ちを切り換えさせたようなものでもあります。町長さんとの話なんです、これはやっぱり信頼関係が無いとですね、取材先との信頼関係というのは、これ非常に大切です。私はこの町長さんとはその後も非常に繋がりがあまして、いろんな所で助けて頂きました。

それから農業の話です。不思議なおじいちゃんがありました。大宜味村で農業をしているおじいさんですが、正月号を飾ろうという事で、北部から山を切り開いてミカン畑をやるとうする70歳になるおじいちゃんがあると、村の人に聞いてみると、どうもアメリカ帰りらしいというんで、あ、こりゃ本格的な農業をやろうとしてるんだなというんで、取材に行きました。そしたらミカン畑をやっているという大宜味村のですね、塩屋湾がありますよね、塩屋湾の橋の上に立ちますと、左手の山手の奥の方にデークマタという所があります。そこを開発して、2万坪ぐらい開発してミカンを植えるという構想で、幾つかもうミカンも植えられておりました。このおじいちゃんにこうこういう理由で、取材したいという風に直接会って話しましたら、けんもほろろに断られて、何事かと思ったら、ブルジョワ新聞の記者はお断りといきなり言われましてですね、その時は何の事かさっぱり分からなかったです。よく話聞くと、この方はアメリカ共産党に入党した、若い頃に入党し、逮捕されてるん

ですね。若い頃、17歳の頃に父親と一緒にアメリカに行きます。ロスアンゼルスに行って、ガーデナーしながら生計を立てて、その時ガーデナーしてる時にですね、チャップリンってご存知ですか。チャップリンの豪邸のガーデナーもしております、非常に可愛がられたというエピソードで、一緒に写真撮ってるのを見せてもらいました。いろいろな有名人の所も、日本人の腕の利く若いガーデナーという事で、あちこちから呼ばれていたみたいです。結構な収入があったようです。その頃、沖縄、日本人というのは相当卑下されておりまして、徹底して差別されてたと彼は感じましたね。悲憤というものがずっとありまして、共産党に入党するわけなんですね。アメリカ共産党の中には、皆さんはちょっと聞いた事無いかも知れませんが、ロングビーチ事件というのがありました。ロングビーチ事件というのは、ロスアンゼルスアメリカ共産党の支部の集会をしてる時に、全員逮捕される、日本人10人逮捕されるわけですね。その時に、8人、9人かは沖縄の方でした。強制送還という事になるんですが、強制送還されれば死刑という運命が待ってるんですね。それでアメリカの人権協会はこれは直接日本に帰すと死刑は免れないという事で、ドイツ経由でモスクワに送るという風な手続きを踏んで、その中の希望者は、モスクワに向った。ソビエトで結婚した人もいれば、スパイ容疑で亡くなった人もおります。宜野湾市の方はいませんが、又吉さんといって、優秀な具志川市の出身の方がおりました。そういう風な歴史を持つてるじいさんなんですね。これを聞いてはじめてブルジョワ新聞の記者はお断りという意味がようやく分かりました。それでも何度か通っているうちに、心を開くようになって、この正月の取材は一応終わって記事になりました。ところが興味は別な所にあつて、宮城与徳が、彼とは、宮城与徳ってご存知ですか。ゾルゲ事件の中に出て来る沖縄の絵描きなんです。名護市の出身です。この宮城与徳とアメリカ帰りのおじいさん、吉元重喜というんですが、その方はアメリカでも知り合いでですね、宮城与徳さんの話はよくしておりました。どうもそのじいさんから聞く、アメリカにいる沖縄の人々の歴史というものは、悲惨なもので、我々が聞いてた、アメリカで成功したというのはどうも、一部でしかないという風なのが明快に見えてきます。北部支社という小さな支社ですが、結構な宝物の、取材し始めると、宝物のような山が結構いっぱいあるわけですね。この方は結局78歳で亡くなるんですが、赤十字病院で息を引き取りました。見舞いに行っ

たと時は、元気でした。「沖縄の医者には僕に毒を打つつもりはないだろうな」とかずーっと、こんな元気のいい事言われて僕も唖然とした事があります。天寿をまっとうしました。その後継ぐべき人がいなくて、その山は2万坪ですからね、誰彼とか買えないんで、何人かの手に渡って行きました。地方部というのは一見して何も無いような感じなんですけど、結構難しい話まで生んでいくような、地域というものは、地域の力というのはこういう風なものを持ってらるんですね。移民、沖縄は移民が多いですから、各地にこういう風な話は埋もっているとします。探り出せば探り出すほど、いろんなものが出て来て、沖縄の歴史を書くというのは、移民なされた方々の歴史も沖縄の歴史ですので、これを追求するのにもひとつの学問かなと思うぐらいに、いろんなものが出て来ます。

そうこうしているうちに私は北部に、3年近くいて、社会部に移りました。社会部は若い記者が一番の花形が事件記者というんで、事件記者を目指す記者は結構おりました。私は事件記者の方に回されました。社会部の事件記者というのは、警察担当というのは、出勤しても、出勤するけど会社には行きません。すぐ県警本部という所に行きます。県警本部の中に昨日の事件というのがありますので、これをチェックして回って、大きい事件があるのか無いのかというのをチェックして回る。警察機構は大きいですから、交通事故もあれば、暴力団とか普通の傷害事件とか麻薬とか色々あるわけですね。あの当時は沖縄は非常に麻薬の多い場所で、ヘロインとかLSDとか大麻とかがはびこっている時代でした。ある日夕方になって5時頃から記者会見があるという風な話になって、聞いておりましたら、名護の源河の山の中の炭焼き窯で変死体が発見されたという事でした。記者の反応は変死体かという事でそのまま帰った人もいますが、炭焼き窯というのが非常に気になって、炭焼き窯がどうなってるのか、北部支社の方に電話を入れて聞いてみたら、第一発見者はどうも匂いがすると、この1週間ぐらいこっち通るたびに匂いがするので、警察に電話した。警察に電話したら、どうも中に動物らしき死体があるという事が第一報でした。夕方5時頃ですから、薄暗くなっている頃なんですね。北部支社の方では写真が難しいけどという風な話になって、私の方は刑事の方に張り込んでおりました。その時ですね、刑事にこの炭焼き窯は密閉されていたか？と聞くと、当然全部閉められてる、と当たり前の話。炭焼きが開いてたら燃えようがないわけで

すね。密閉されていて中に変死体が発見されたという事ですから、自分でこの炭焼き窯の外から土を被せて閉じる事は出来ないじゃないか。これはもう殺人事件だ。全員、すぐ他殺の線で取材をスタートさせました。翌朝にはもちろん新聞は他殺か自殺の両方の線で、という風な警察が調べを始めたという事になるんですが、圧倒的に他殺の取材が新報の特徴でした。捜査が進むに連れて科学捜査班というのが県警にありまして、この科学捜査班というのがちょっとした数字を書いた、上着かなんかの数字の書いた物があって、これが油が染み込んで字が見えないような物なんです。どうにかして浮き彫りにして数字をみたら、ランドリーの番号なんです。どっかのクリーニング店に出した時のランドリーの番号です。この番号から見て間違いなくこれが米兵だという事を断定します。米兵が殺されたという事まで大よそを掴んだわけですね。そしたら殺されたとなるとこれは、もちろん犯人がいるわけですから、犯人も米兵かという風な話ですよ。この事件はこれからしばらくしますと、どうも、殺された人は、麻薬を使った反応が出て来た。麻薬の常習犯という線が出て来てその時から、県警は非常に色めきたって、米軍の捜査機関と一緒にこのヘロインを追いかけて始めます。このヘロインの出先を追及するのは生半可じゃなかったですね。そうこうするうちに、桑江の方に陸軍病院というのがありますよね。陸軍病院でヘロインの打ち過ぎで一人死んだのがあると、そのヘロインを打ち過ぎて死んだというのを調べてみますと、殺された男とつながりのある男なんです。だったら、これらは、ようするにヘロインの麻薬の密売のグループの中の仲間割れかという風な、警察は捜査を始める。実際捜査が進むと殺された方は、ある人を誘拐して身代金を取るという事で共謀した。ところが自分は怖くてCIAにこの事を告げるわけですよ。そしたら密告したという事でこの男は殺されたという事のようなんです。ほかに、退役軍人が沖縄におりまして、沖縄で商売してる。その社長の息子を誘拐して400万ドル身代金を要求して、400万でしたか、40万ドルでしたかね、を要求して、逃亡を謀ろうという段取りの誘拐殺人事件。それが発覚したわけですから、このCIAに話した、殺された方の調書によって、犯人が分かりました。追いかけていきますと前のコザ市一帯で中心となってヘロインを密売しているボスでした。パターソンという名前の有名な事件がありまして、密売事件ですが、この人が首謀核でコザ市一帯で、ヘロインを密売している組織のグルー

プのボスでした。一段落終わったのも束の間、別の事件が発生しました。今度はLSDを密売しているという事件で、別の情報がありまして、これは麻薬捜査課という所があります。今防犯少年課になるのかな。手入れがあるという情報がありまして、夜、ちょうど夕方頃から、私もあの時は用心してパンタロンというのをご存知ですかね。あのズボンのこうラッパ状になったやつ。それにわざわざ着換えて、現場の方に向かいました。現場は、誰が私服刑事なのか、誰が何なのかよく分からんようなところで、ちょうど今の沖縄市ですね、あれ何と言いましたっけね。パラダイス通りじゃないや、何通りっていうんですか。あっち側の何て言ったっけ。中野町の、中野町じゃない、一番街の隣のゲート通りじゃなくて、もう1つあっち側の。ん？

■(会場から) パークアベニュー。

■幸地光男 あ、パークアベニュー。そうです。パークアベニューから上っていくわけですね。パークアベニューから行きますと、三差路になりますよね。その角の方に大きなクラブがありました。警察官の後を追っかけますと、そこに踏み込む様子なんで、私もその前の方で、30メートル離れた手前の方で様子を伺っていますと、どっから現れて来たか分らんが、30人ぐらいの警官があつという間にドドドドと中に踏み込んでいる。そしたらちょうど逮捕されたところで、おとなしく逮捕されました。ところが本人はNO、こういうものはやってないと言うんです。LSDの場合ですね、ちょうどLSD仲間達のマークみたいといったらおかしいけど、桐の葉っぱみたいな絵が描かれているのが、あっちこっちにあるんです。これがなんかそこの常習している人達の暗黙の合図みたいな感じでして、これが3つほど壁の方に貼られておりました。これが発端となってこっちの方の麻薬犯、これはLSDですが、逮捕されて、この事件の解明もまた動き出します。そしたら先程お話ししましたバターソンというグループと、どうもこっちのグループとの動きがよく似てると。すでに捜査官達はこいつ等結びついてるという捜査が展開されていって、刑事達の非常な執念深い、2ヶ月余で、別のLSDのグループ達の、今度はコザのグループのLSDグループが浮かび上がってきて、十何人ですかね、これが逮捕されました。そしたら、この両方のグループはクスリを一体じゃあどこから持ってきたか。一致してるのはタイから持ち込んで。ヘロイン10キロ動いたというまで

突き止めましたけど。どこに隠してるかさっぱり分からない。ヘロイン10キロとい
いますと、ザッと15億円ぐらいです。15億円というのは砂糖粒のようなものが純な
物で1グラムで15億円ですから、これを水で混ぜたり薄めたりすると、30億、あつ
という間に30億になる。末端価格ですよ。そういう風なのが浮かび上がって、麻薬
捜査班達は正月も返上して、殆んど帰らないまま捜査につきっきりです。これが解
決するのは半年ぐらいかかりました。このグループ達は何箇所かグループがありま
して、普天間のグループとか、那覇のグループとか、北谷のグループとか色々あり
まして、それが6つのグループが浮かび上がってきて、この密売してる者の中に沖
縄の女性も含まれています。それを通して沖縄の人達にもこのヘロイン、大麻、L
SDが流れていっているわけですね。ヘロインの事案はこの大物の連続逮捕によっ
て、この事件を境に新聞からヘロインという字が消えていきました。LSDという
のも消えていきました。その後に出て来たのが、今残っているのが大麻。日本から
入って来て、或は香港から来て、或は韓国から来て、或はタイから来てという風な
展開で沖縄には大麻が入って来てます。私は今現場から離れてるんで、よく分かり
ませんが、沖縄からヘロインの事件が消えたのは、この炭焼き窯の殺人事件がきつ
かけだったと思います。

もう1つ、皆さん覚えてますかね。名護市の近くに羽地中学校という所がありま
す。羽地中学校の生徒が、友人2人で、女生徒が友人2人で自宅に帰る時、夕方
でした。その女性が家の前に来た時に、二人の家は別々ですので別れました。その直
後です。ワンボックスカーに乗った男が、その中の1人を拉致して、車に乗せて逃
走しました。これをたまたま目撃した人がおりまして、すぐ通報して捜査体制が敷
かれました。名護署が中心になって各検問所が張られましたけど、この日ワンボッ
クスカーは見付かりません。誘拐事件だというんで皆さん大変色めきだって、これ
は身代金の誘拐なのか、何の誘拐なのか犯人から連絡が来るまでわからないんです
が、まったく進展の無いまま時間だけが過ぎてきました。その間に、新聞社には非
常に難しい論議がありました。新聞社の規定、倫理規定には誘拐された時に名前を
公表していいのかというのがあります。名前を公表すると、もし見付かった時に生
きていたなら、女性の場合、強姦されていたならどうするんだという事なんです。
この人の二次被害の事を、人権を考えると名前は公表できませんというひとつの論

ですね。もうひとつは実名報道が報道の使命であるという論ですね。抽象的な名前じゃあ訴えようが無い。これはこの問題が解決するまでずっと社内では論議が続きました。事件は半年ぐらい経つんですが、その時社会部の私はちょうどデスクをしておりました。全く進展が見られないんです。担当の記者はほんとにイライラしてる。警察官の話聞いてるんで余計イライラしてる。年を越さないという、警察の刑事達の奮闘振りを見てるだけに、非常にこう辛い思いで事件を見てました。が、その間、顔写真は どうします？ 顔写真見せて、新聞に出たらこの子が誘拐されたまではないんだが、その後この子の人生を考えると、顔写真を出すべきかという論議もあります。皆さんならどうします。断は下しにくい。報道の姿勢というのが問われたままだと顔写真も出さないと。そしてその代わりその子が着けていた学校の制服を出そうと。こういう服装で歩いている人がいたら、或はこうワンボックスカーに入れているんだったら、事件に関与するから情報を下さいという事で報道したのですが、これでも出て来ない。幾つか情報はありました。石川市で見たとという情報が有力で、さあという時に、実は違うワンボックスカーだった。制服を見たというのは実際その制服に似ていた別の高校の制服だったり、そういう情報が良く来ましたが、有力な情報というのはずっと来ないままでした。で、12月押し詰まった頃ですね。鹿児島で傷害容疑で逮捕した男が自供して、私が沖縄で少女を殺したという自供をして、逮捕されてるとというのが鹿児島県警から入って来て、それでもうひとりの男も逮捕された。この2人は誘拐拉致して逆走して国頭の方に行って、国頭の方の山の中でその日のうちに殺したという事件でした。そこで考えてほしいのは先程からいう、実名報道にした場合どうなんですか、顔写真出した場合どうなんですか。半年間も悩みました。ある日、顔写真を出すという事に踏み切りました。理由は関係者から写真を載せて、情報を1本でも多くくれるように報道して貰えませんか、という話がありました。そしてもうひとつは沖縄県がポスターを作って、沖縄中に貼り出した。その時にはもう新聞社だけ出さないわけにいかないという事で踏み切った。こうした問題は社会部にいると、たびたびあるんですよ。人権をどう守るかという時のせめぎ合いが非常に辛い。

もうひとつ、1995年の米兵3人による少女乱暴事件。これは小学校生がですね、自宅近くの文房具屋に文房具を買いに行つて、帰り際、米兵3名に襲われて、その

まま乱暴された事件なんです。ところが3人は基地に逃げたんで沖縄県警は逮捕する事が出来ません。これ皆さん学校でよく習ってるとか思うんですが、地位協定の問題です。地位協定は要するにアメリカとの、簡単にいえば、約束事です。基地の外で現行犯逮捕した時は逮捕出来るんですが、現行犯の場合逮捕出来るんですが、基地の中に逃げると逮捕出来ないという風な簡単に言えばそんな話なんです。これは沖縄国際大学も体験しております。ヘリ墜落炎上という皆さんの学校にヘリが落ちて炎上しました。その時唖然としたのは機体が落ちて、物的証拠を握ろうとする警察官を米軍は捜査をさせまいと線を張って、沖縄県警は排除されました。学長すら入れないという状況でした。この日米の地位協定というものが、今日の基地問題を語るときに、日米安保はもちろんの事ですが、地位協定というものがずーっと尾を引いてるんですね。これは復帰する時に我々の先輩達が片づけ切れない問題として、残ってしまいました。これは誰に残されたかという、あなた達にです。我々になんてですね。あなた達は、この地位協定どうするかというのをひとつ、学生の間に真面目に考えて自分の結論を持って頂きたい。ドイツも敗戦国で米国と地位協定がありました。ドイツの場合は冷戦が終結した時に地位協定改定しました。日本は依然としてそのままですね。日本は現在も米軍駐留コストの70%を負担している。世界に例がない。この少女暴行事件で県民大会が宜野湾の海浜公園でありまして、8万5千人の人が集まって、抗議集会を開きました。その後多少地位協定が運用面ではちょっとよくなりますという程度の事はありました。要するに米国が配慮しましょうという程度の動きはあったんですが、簡単にいえばアメリカ側が好意的に考慮しましょうというだけのこと。そんな程度でしか解決が出来無いというのは情けない。次々起こる米軍の事件で警察官が地団駄踏むのをよく見てます。植民地時代だった時と全く変わらんものなんですね。優秀な刑事ほど金網を挿んでちくしょうとよく泣いておりました。これは我々が負わなきゃならない宿題なんですね。一緒にどうにか解決せんとならん重要な問題なんです。

余談なんです、三民主義と唱えた孫文という中国の政治家がおります。これは後に毛沢東の新民主主義論でしたか、にも影響を与える、中国には非常に尊敬されてる政治家なんですね。日本は井伊直弼がああ、ちょうど幕末の開国の頃にですね、地位協定を結びます。「安政の条約」というんですが、これは不平等条約、今でい

う、我々の今の地位協定と変わらん。だから孫文は「不平等条約であるから、日本は植民地となった」と断じております。ところがその時の日本人は、日本は植民地だとは全く思っておりません。この安政の条約で日本は植民地となったという事で、その時、外国人は横浜とか神戸におります。神戸の異人館とか聞いたことがありますか。あの一帯ですね。そして横浜の港の見える丘というあの横浜です。あの一帯は居留地といいます。居留地とは中国では租界ですよ。居留地とは要するにそこでの犯罪は地位協定、安政の条約でそのまま植民地なんですから、不平等条約が通用する所です。ところが日本人はのほほんと異人館を見て異国情緒という、のほほんとしたところがあるんですね。その居留地の問題と我々と一緒の話ですよ。幕末のお話なんです。あの坂本龍馬が飛び出した頃のお話なんです。これと今の沖縄とどうなんでしょうか。

この地位協定は結局は太田知事が代理署名拒否という事で激しく抵抗します。代理署名拒否というのは簡単に言えば、軍用地主がこの土地を借りていいですよというのを断れば、市町村長が代りに代理で、じゃあ、私が署名しましょうという事なんです。ところが市町村長さんも私は代理で署名出来ませんとなったら、県知事がやると。これがなければ出来ないという事なんです。これを拒否した知事は色々圧力がかかります。最後はとうとう裁判になるんですが、裁判では敗れました。地位協定は結局、我々が今持つてるレベルのもんでしかないんです。孫文が生きていたら、「沖縄は植民地」と断じるでしょう。

政経部に移った時はかなり、選挙が多くてですね、一番象徴的なのは西銘順次と、屋良朝苗という革新保守の一大決戦というのがありました。後に西銘順次は保守系のドンとして知事になるんですが、二人とも非常に人望の厚い方で、屋良朝苗がその選挙は勝ちました。その時の復帰運動というのを聞いた覚えがあるかと思うんですが、復帰運動の場合、新聞がですね、朝刊で、どこそこで反対運動が起きると書くくと、現実に反対運動が燃え上がって、2倍以上3倍以上の人が集まったりしました。新聞が書くのと響くという、非常に記者が生き生きしていた時代でした。社会と共に新聞があるというのを実感したのを、復帰運動、1970年代そういうのを非常に実感した時代でした。

西銘順次さんが知事になられて2期目でしたか、ハワイ県人会の何周年かのお祝

いに駆けつけるという事でアメリカに行って、地位協定の陳情の要請も兼ねてでアメリカに渡るんですね。その流れで帰りはハワイに回るという予定で日程が組まれてました。アトランタという町がありますね。アトランタに降り立った時に空港入口にアトランタの、沖縄県人会の婦人会が旗を立てて、西銘知事歓迎という風に迎えるわけですよ。知事はアトランタに沖縄の県人会があるとは、思いもよらないでそこにびっくりして、感激してその夜はその婦人会の皆さんの中の、何さんでしたか、知念さんでしたかな、その方の家に招待されて、サターアングギーを食べたとかンジャンパーの和え物があったとか、非常に感激して、ゴーヤーまで作ってたよと、後で自慢げに話をしてました。大歓迎を受けて彼は帰ってくるんです。その時彼は帰りの飛行機の中でこういう人達をアメリカや南米にいる人達を沖縄に呼んで、パーティーをやらうとかっていう風な発想なんですね。全部招待したらどれぐらい掛かるかという、総務部長にまで話して、実はそれが発端となって、アトランタのゴーヤチャンプル、サターアングギーが発端となって、世界のうちなーんちゅ大会というのがコンベンションセンターで開かれる事になる。これは5年後に開かれました。その時ブラジル、アルゼンチン、ペルー、ハワイ、アメリカ、ドイツ、フランス各地から集まって来ました。世界中の沖縄の人が集まった時に、こんなにまで沖縄の人が世界に散らばってたのか、本当の沖縄の人の力のすごさを見せつけられました。この世界のウチナーンチュ大会は実はちょっと自慢すると、琉球新報がその前に世界のウチナーンチュという事で、連載を始めてました。一面カラーで、連載を始めて大変好評で、ブラジルとかペルーからとなると、この新聞に自分のお婆ちゃんが出てから送りたいからって、30部40部買いに来るのがしょっちゅうでした。沖縄中がむさぼり読んで小学校の授業とか、中学校の授業に、社会科の授業によく使われたっていうのをよく聞きました。サターアングギーがまさか、世界のウチナーンチュ大会まで、花火が上がるとは思いませんでしたけれど。西銘さんはそのあと、県立芸大を作ります。コンベンションセンターが作られたのもその、サターアングギーとは無縁ではないような感じします。時間大丈夫かな。

ちょっと話は飛びますが、1人だけちょっと話して置きたいのがある。サッカー好きな人がおられますか。実はですね、巨人軍の長嶋監督が監督を辞めた、辞めたというか、巨人軍の監督を首になった時、1年後に評論家として沖縄に、キャンプ地

を取材に来てました。その時私はちょうど運動部にいたんで、長嶋の後を追って、取材に行きました。さすが長嶋監督で、60人ぐらい本土から記者が付いて回って、その中に加わって、今の横浜ベイスターズの取材、そして名護の日ハム、広島という風な順序で取材しに行くその後を追っかけてるわけです。彼は3日も4日も居られる身じゃないんで、朝早く8時頃ですね、横浜ベイスターズの球場に現われました。その時、朝8時というのは普通練習はまだ始まってないんですよ。プロ野球のキャンプは10時から始まる。何故8時に行くかというと、横浜ベイスターズがミスタージャイアンツの、ミスターの為には、その日は早くから練習を開始しようという事で、特別な時間を組んで待っている。その時8時にちょうど球場の側から走って、彼は足が早いで、多目的広場というのがありますよね。あの踊りする所とか、カチャーシーする所とか、あっちを通過する時に、小学校の低学年の子供達が何人か野球のユニホーム着て、練習試合かなんかあるんでしょうね、靴を履こうという準備してる。長嶋さんがこの少年達の後ろから「おはようございまーす」と、例の甲高い声で言うと、誰が挨拶したか分かんと思うんだが、この子供たちはすっと立ち上がって、後ろを振り返って帽子を取ってきちんと礼をして元気に、「おはようございます」という。そして、しばらく行くと向こうのコーナーの方で今度は又、サッカーの試合があるんでしょうね。同じような小さいのが、靴を、シャツを着けようとしている時、同じように長嶋さんが大きい声でおはようございます。そしたらこの少年達は後ろを振り返って座ったままで、あーおはようございます。という言い方でした。その時、記者団の方を振り返って長嶋さんが、「地元の記者おられますか」と、「いますよ」と。そしたら、「沖縄はサッカー弱いだろう」といきなり言われてましてですね、その時、高校のサッカーは1勝もしておりませんでした。「まだ、高校の全国大会でサッカーは1勝もしておりません」「挨拶を教えきれない監督がいる間は駄目だ」と言われてるんですね、見る人はいろんなところ見るんだなど印象に残ってます。子供を育てるには要するに監督だという風な事が言いたかったんでしょうね。実際その何年後かにはサッカーで沖縄は何勝かするんですが、その時は沖縄はサッカーは弱かったです。国体があって、国体選手に出た人達が現在、高校の監督や中学校の監督をしてるんです。国体はある意味で選手を鍛えたんですが、何よりもその後の監督を育てたと。それが沖縄のサッカーや野球、スポーツが

強くなった、強くなってきたという理由だと思います。ハンドボールにしろバレーにしろバスケットにしろあの当時の選手が、各地で監督として活躍し沖縄の現在のスポーツ界を支えていると思います。ちょっと野球の話しますと、裁監督ってご存知ですかね。亡くなったんですが。沖縄水産が連続準優勝した時の監督なんですね。その裁監督がよく「野球とは考えるもので、考えるものだ」と言うのを口ぐせのように言っていました。野球は何故考えるものかというのはどういう事か。野球はピッチャーがボールを持ちます。1球投げます。1球投げたら次に投げるまでまだ間があるんです。もう1球投げます。1球投げたらまた間があるんです。野球はこの間を考えるためにあるんだ。よく口ぐせのように言っていました。野球したいやつは考えきらないと駄目だ。というのが彼の口ぐせでした。そして沖縄は彼のおかげで隣近所の学校が強くなって、とうとう優勝までしていますね。まだ色々国体のことなど、具志堅用高さんのことなど話したいのですが、時間が来てしまいました。その間ずっと雑な話になったかと思うんですが、記者の生活というのはザッと見てこんな感じです。もっと詳しく説明出来ればよかったんですが、一端ぐらい理解出来たら、ありがたいです。どうもありがとうございました。

■司会 幸地先生ありがとうございました。小さな事を嗅ぎ分ける事がジャーナリストには必要なんだという事がよくわかりました。もう少し時間があるので、この際、新聞記者或はジャーナリストとしての幸地先生にですね、なんか質問とかある方は挙手をお願い致します。ぜひ質問して下さい。

■幸地光男 記者志望の方いらっしゃいますか。

■司会 はずかしがり屋ですかね。なにかありますか。僕がじゃあもう一回聞いていいですか、幸地先生のお話聞いて、ちょっとどうかかと、気になるなと思ったのは、取材対象との関係っていうのが大事だという話を致しましたが、もう1つジャーナリズムのポジションというのは、権力に対するチェックというのがあると思うんです。もし政治家、地方の方に行くと、色んな事をやらないといけないと思うんですけど、政治部の記者となると、多くの政治家、或は公務員との付き合いとなってくると思います。この場合、例えば取材対象としての公務員と、権力をチェックするためのジャーナリストとこのバランスというのを、幸地先生はどのように意識してとっていらっしゃったのか、ちょっとお聞きしたい。要するにマスメディアの第

4の権力と言われるわけで、その辺ですね、ちょっと聞いてみたいなという風に思いました。お願いします。

■幸地光男 一線を引くというのはこれ当然です。ちょうど、友達同士でもそうでしょうけど、馴れ馴れしくというわけにはいきません。ある時は敵対せんとならん時があるわけですね。或はある時は応援しなきゃならない時もあります。取材対象と一線を画すというのは常に必要です。「ブッシュの戦争」でしたかね、書いてる記者がいるんですが、非常に名作だと思うんですが、でも私から見ると、あんまりにも出来過ぎていると。これはブッシュが書かしたような感じするんですね。これがウォーターゲート事件を暴いたウッドワード氏なんですね。同じ人とは思えないぐらいに今度は、書かされているという風な感じを受けました。あーいう風になるとジャーナリストじゃなくて、リポーターに過ぎないんじゃないかという風な感じも受けています。

■司会 分かりました。一線を画すという事ですね。僕だけ聞いて申し訳ないですけども、琉球新報が先駆だと思んですけども、記者の署名入りで記事が書いてありますね。その意義とそうした効果というのをぜひ聞かせて下さい。

■幸地光男 ふたつあります。ひとつはスター記者、力のある記者を育てようという所があります。スター記者はある意味で若者の目標になりますね。あーいう記者になりたい、あーいう記者を目指したいという、非常にこう、奮闘した記事が出てくる時に、スター記者は必要です。4番バッターというのはどうしても必要で、エースというのはどうしても必要です。これが3名いるか4名いるかというのは、新聞社の力を見せ付ける場面でもありますね。だからぜひともスター記者を育てたい。もうひとつは逆にその記者が来たら、嘘の混じった取材をさせてしまう所もあります。踏み込めなくなってしまう時もあります。これを乗り越えんとならんわけですから、両面は持っております。

■司会 分かりました。ありがとうございます。他に質問したい人、他にないのでしたらでは時間が来ましたので、これで幸地光男先生の講演会を終わります。皆さん御清聴ありがとうございます。

■幸地光男 どうもありがとうございます。